



Data

監督・脚本: 岨手由貴子
原作: 山内マリコ『あのこは貴族』
(集英社文庫)
出演: 門脇麦/水原希子/高良健吾
/石橋静河/山下リオ/佐
戸井けん太/篠原ゆき子/
石橋けい/山中崇/高橋ひ
とみ/津嘉山正種/銀粉蝶

👁️👁️ みどころ

“内部生”と“外部生”ってナニ?同じ慶応大学に入っても、お嬢様と田舎出は全く違う!しかして、「シスターフッドムービー」たる本作で、門脇麦 vs 水原希子はどんな“対決”を?

お嬢様のお見合い風景は少し退屈だが、上流階級なら、さもありません。他方、慶応の授業料は高いから、田舎出の苦学生はキャバクラのバイトもやむなし?

2人の女たちの中核に位置するのは、高良健吾扮する弁護士から政治家秘書に転じる青木だが、本作での彼はあくまで2人の引き立て役。森喜朗会長の辞任後、JOC(日本オリンピック委員会)の女性理事が4.2%になったが、本作の女性色は最初から100%。そのため、私にはわからないことも多いが、世の女性諸君は本作を如何に?



■□■ “貴族”には違和感が!原作は? ■□■

私が『あのこは貴族』というタイトルを聞いて、興味を持つと同時に違和感を持ったのは、そもそも日本に貴族はいるの?ということ。もちろん、今の日本に貴族はいないから、より正確には、“ノブレス・オブリージュ”の意識がイギリスに比べて極端に弱い日本に、“貴族”のような特質を持った人種はいるの?ということだ。例えば、三島由紀夫の生まれや育ち、そして彼の遺作となった『豊饒の海』全4巻を読めば、彼の中にははれっきとした“貴族の香り”をかぐことができる。

しかし、本作導入部で描かれる榛原華子(門脇麦)たちの姿は決して貴族ではなく、単なる上流階級にすぎない。本作の主人公であり、『あのこは貴族』というタイトルになっている華子は貴族ではなく“上流階級のお嬢様”と呼ぶのがピッタリなのだ。

他方、東京で開業医をしている榛原家に生まれ、その箱入り娘として育てられてきた華

子の、さらに上に行く上流階級が、“見合い”の席で奇跡的にピッタリ相性があった弁護士
の青木幸一郎（高良健吾）。青木家は政治家も輩出している名門だから、慶応大学の初等部
からずっと同級生の親友で、今はバイオリニストになっている友人の相楽逸子（石橋静河）
が華子に言うように、青木は明らかに「私たちの家よりも“上の階級”」なのだ。

そんな視点で山内マリコが書いた面白い原作が『あのこは貴族』だから、“貴族”と言う
言葉にはさすがに違和感を持ちつつ、興味は津々……。

■□■ “シスターフッドムービー” の、もう1つの対極は？ ■□■

カタカナ表記が全盛の昨今、本作は「シスターフッドムービー」と呼ぶらしい。その「シ
スターフッドムービー」の一方の主人公が華子だが、その対極にあるのが、同じ慶応大学
生ながら、こちらは富山の田舎から出てきた“外部生”の時岡美紀（水原希子）。華子のよ
うな“内部生”は、「ちょっとお茶」をする時、お茶とケーキで5000円も当然らしいか
ら、美紀も、美紀と一緒に“外部生”として富山から入学してきた平田里英（山下リオ）
もビックリ！

私は昭和42年に愛媛県松山市から大阪大学に入学したが、当時の私の絶対的な条件が、
「私学はムリ。国立一期校のみ」だった。入学試験は何とかなっても、久しぶりに里帰り
した美紀の実家を見ると、そもそも慶応大学に入学し、4年間の学費を捻出すること自体
が無理だったのでは？そう思わざるを得ない。また、私の時代のアルバイトは家庭教師が
ベストだったが、今時は？父親の仕事が厳しくなってくると、美紀はバイトを余儀なくさ
れ、キャバクラ嬢を始めたが、その行きつく先は？バブル時代に北新地を飲み歩いて
いた私は、大学生がアルバイトでやっているホステスが大好きで、本職のホステス以上に多
くの友人がいたが、私のような優良な客（？）はまれ。美紀のような美人の慶応生がバイト
でキャバクラ嬢をやっていると……？

■□■ 格差は広がるばかり！ 出会うはずのない2人だが…… ■□■

1967年4月の入学後、すぐに学生運動にのめりこんだ私は、男にしても女にしても
“面白いヤツ”が大好きだったので、基本的にお嬢様は嫌いだった。それはなぜなら、何
を話してもお嬢様の答えはワンパターンで決まっており、面白みがないからだ。本作導
入部にみる華子のお見合いストーリーを観ていると、まさにその典型だ。それに対して、
青木の方は当然（？）女の扱いに馴れているから、華子との見合いは適当にはぐらかすの
だろうと思っていると、いやいや……。いとも簡単に最初の出会いからうまくハマリ、
青木家では華子の“調査”もパス。めでたく結婚式に至りそうだから、アレレ……。他方、
学生時代に美紀から講義のコピーを借りたことがきっかけで、青木は密かに美紀との“関
係”を続けていたから、こちらは、なるほど、なるほど……。

「シスターフッドムービー」たる本作の両ヒロインはもちろん華子と美紀だが、本作で
は華子の補助役としてバイオリニストの逸子、美紀の補助役として同じ富山出身の里英が
ストーリー形成に大きな役割を果たすので、それに注目！

1回目の見合いから今は結婚に向けて着々とコトを進めている華子と、結局は大学を中退し、ホステスを続けているうちに常連客の紹介で今の会社にやっと就職できた美紀は、同じ慶応大学生であっても、“内部生”と“外部生”という違いの他、そもそも住む世界が全く違うもの。したがって、この両ヒロインの接点は何もないし、本来は会おうはずのない2人だったが・・・。

■□■女2人の“初対決”は？相手監督の脚本と演出は？■□■

本作中盤のハイライトは、会おうはずのないヒロイン2人の出会いと、そこで女2人の対決・・・？その舞台は高層ホテルのラウンジだが、華子と美紀を青木絡みで引き合わせたのは逸子だ。これは、とあるシャンパンパーティーでバイオリンの演奏をしていた逸子に美紀が声をかけた際、たまたま美紀が青木と連れ立っているのを発見したため。

本作は女性作家・山内マリコの原作小説を、本作が長編第2作目となる女性監督・岨手由貴子が脚本を書いて演出したもの。したがって、その後そこでどんな会話が展開していくのかは、男の私には全く想像がつかない。というより、そもそも、逸子はなぜ華子と美紀を自分の仲介で引き合わせようとしたの？その狙い(?)についても全く見当がつかない。

先にやってきた美紀に対して、逸子は「2人を対決させようとか、美紀さんを責めようとか、そういうんじゃないです」、「日本って女を分断する価値観が普通にまかり通っているじゃないですか。私、そういうの嫌なんです。本当は女同士で叩き合ったり、自尊心をすり減らす必要ないじゃないですか」と述べ、「ただ華子には、すべてを了解したうえで結婚してほしいのだ」と説明したが、それに対する美紀の返答は？そして、逸子のこのセリフをどう考えればいいのか？そこで美紀は「そうだね・・・」と静かに共感を示したが、そこに華子がやってきた後の3人の女たちの会話の展開は？

森喜朗東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長の辞任後、JOC（日本オリンピック委員会）の理事会は、新たに女性理事12名を加え、女性の比重が42%になったが、本作中盤のハイライトたるこのシーンは、脚本も演出も出演もすべて女ばかりで、男の立ち入るスキは全くない。この女同士の会話の結果、青木は一方的に美紀から「もう会いません」と告げられることになってしまったが、男の私に言わせれば、そんな一方的な通告に青木はきっと戸惑ってしまったはずだ。本作は「シスターフッドムービー」らしく、この中盤のハイライトにおける女2人の心理描写は丁寧だが、その反面、青木はつんぼ状態に・・・？

■□■結婚生活は？女同士の起業は？どちらがベター？■□■

本作では、“刺身のツマ”状態に置かれている青木幸一郎役の高良健吾は、ある時はお坊ちゃんまの“慶応ボーイ”として、また、ある時は青木家の複雑な遺産相続人の1人として、そして何よりも、本作では華子の夫役としてさまざまな顔を演じ分けているから、さすが。しかし、それはあくまで同じお嬢様育ちで、青木家に嫁いできた華子の“次の生き方”を

考えさせる補助的な役割だから、本作の男はツライ。弁護士から国会議員の秘書に転じて二世議員を目指さなければならない青木は大変だから、華子は本来それを補佐し、内助の功を発揮すべきことが求められていたが、さて華子は・・・？

アイドル歌手だった高田みづえが大関・若嶋津と結婚した後、二所ノ関部屋の女将として立派に内助の功を果たしていることに比べれば、本作で華子が見せる“決断”は如何なもの？青木は（男は）そう思わざるを得ないし、華子の行動は到底納得できないものだが、岨手由貴子監督はその点を如何に？

他方、本作ではお嬢様の華子でもそれだけ強いのだから、田舎者ながら“東京砂漠”の中でたくましく生き抜いている美紀や里英が更に強いのは当然。一時的に富山に戻っていた里英は、今は起業を目指して東京で立派に生きていたから、里英が美紀に協力を求めれば・・・？私は弁護士として女同士の起業がうまくいかなかったケースもたくさん見ているが、現在は逆に大成功しているケースを身近に見ている。そんな私の目には、美紀と里英が組めば最強！そう見えたが、さて・・・。

■□■女2人の2度目（クライマックス）の対決は？■□■

大阪市北区で都心居住を続けている私には車は不要で、電動機付自転車が必需品。しかし同時に駐輪場所に苦勞するし、二人乗りは厳禁だ。そんな私だから、出張の際、東京駅周辺で自転車に出会うと親近感がわくが、二人乗りはまず見たことがない。ところが、本作後半ではそんな風景も・・・？それはともかく、本作ラスト近くに訪れる女2人の2度目の対決（？）はあまりの偶然性にビックリだし、あまりの出来栄え感もある。しかし、当然それが本作ラストのクライマックスになる。

『愛の渦』（14年）（『シネマ32』未掲載）で大胆な演技を見せた女優・門脇麦と、いかにも都会的で洗練されたセンスが光る女優・水原希子を対比すると、慶応の“内部生”と“外部生”をどう決めるかは難しい。本作の選択もありだが、逆の選択も面白かったのでは？そんな興味を持ちながら、美紀のマンション内で交わす2人の会話を聞いていると・・・？

狭いとはいえ、ソファまで置いてある部屋。また、ベランダに出れば、少し欠けているとはいえ、東京スカイツリーが目の前に広がる部屋。これは美紀には少し立派すぎるが、それは映画だから止むなしとして、このクライマックスでは、ベランダでアイスを食べながら華子が語る次のセリフに注目したい。それは、「こういう景色はじめて見ました。ずっと東京で生きてきたのに」というものだが、それに対して、美紀は「そっちの世界と、うちの地元って似てるよね」と笑いかけることに・・・。2人は今たしかに同じ風景を見ているのだが、さて、そんな2人のホントの気持ちは・・・？

2021（令和3）年3月10日記